

令和元年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [令和元年度資源評価](#) > ダイジェスト版

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus micropus*

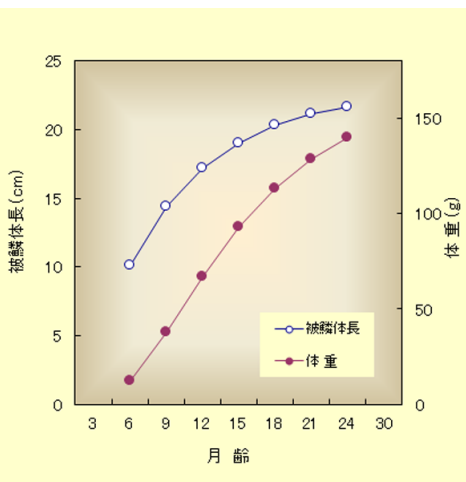
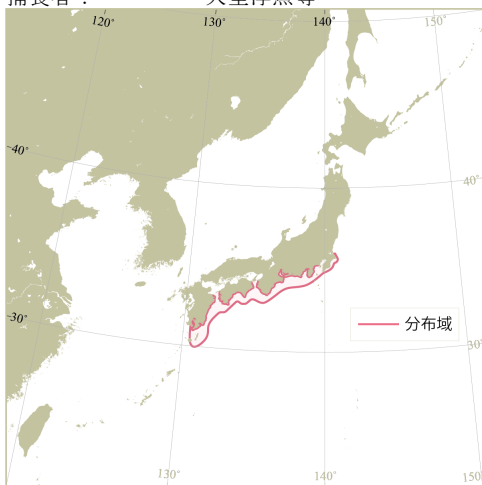
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命： 2歳前後
成熟開始年齢： 9カ月（30%）、12カ月（100%）
産卵期・産卵場： 10～翌年7月、盛期は3～6月、前半は土佐湾周辺海域中心、後半は伊豆諸島～関東近海にも広がる
食性： 動物プランクトン等
捕食者： 大型浮魚等

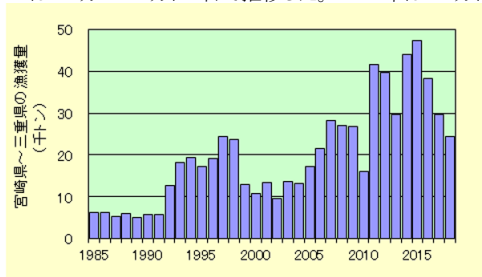


漁業の特徴

主にまき網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網、高知県では多鈎釣りでも漁獲される。仔稚魚(シラス)期は船びき網で漁獲される。漁獲の大部分は0～1歳である。宮崎県～三重県の漁獲量は太平洋岸各県(宮崎県～千葉県)の総漁獲量の約90%を占める。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

宮崎県～三重県の漁獲量は、1985～1991年は5,000～6,000トン台であったが、1992～1998年に増加し、2万トン前後となった。1999～2004年は1.0万～1.4万トンまで減少したが、2005年以降再び増加傾向となり、2011～2017年は3.0万～4.7万トン台で推移した。2018年は3.0万トンを下回り、2.4万トンとなった。



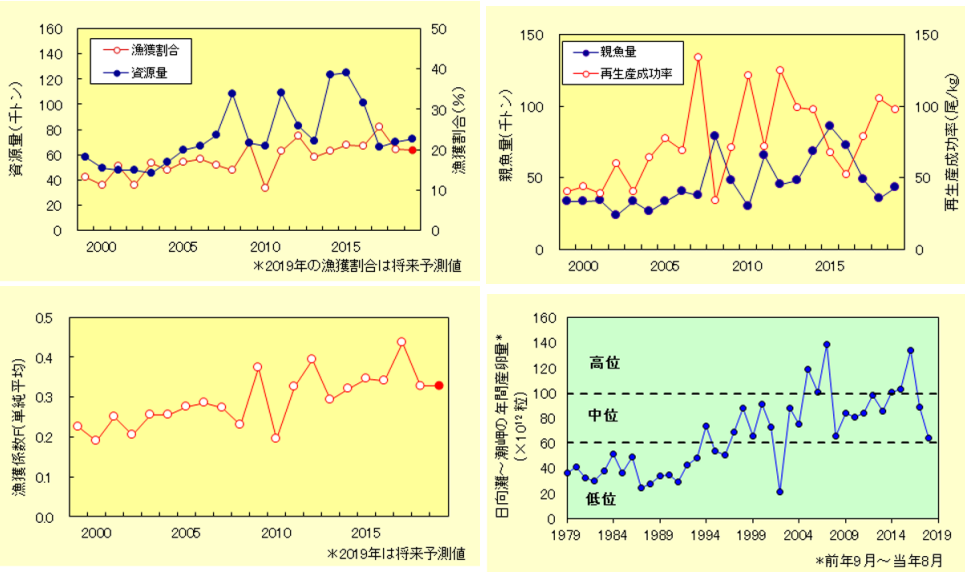
資源評価法

1979～2018年卵稚仔調査の結果から、日向灘～潮岬(コホート解析対象海域に相当)の産卵量を算出して資源量指標値とし、資源の水準を判断した。宮崎県～三重県の漁獲を対象とし、1999～2019年の年齢別・年別(半年別)漁獲尾数等に基づくコホート解析により資源量を推定した。半期(1～6月、7～12月)単位で寿命2歳(24月齢)までの4期とし、半年単位のコホート解析により年齢別資源尾数、資源量、漁獲係数を推定した。資源量の推移より動向を判断した。

資源状態

資源量は、1999年以降、4.6万～12.5万トンの範囲で増減を繰り返しながらも安定して推移しており、2019年は7.3万トンであった。親魚量も、2.4万～8.6万トンの範囲で安定して推移しており、2019年は4.3万トンであった。長期的には再生産は高い水準で順調に行われていることが示唆されるものの、直近の資源は過去最高となった2015年から減少している。資源水準は、産卵量の最大値と最小値の間を3等分して高位、中位、低位とし、2018年の産卵量(64兆粒)より、水準は中位と判断された。動向は、直近5年間(2015～2019年)の資源量の推移から、減少と判断した。長期的には再生産は順調であるが、直近の資源は減少傾向にあることから、その動向には注視が必要である。





管理方策

2003年以降の資源水準は中位～高位を保っている。直近では資源は減少傾向にあるため、親魚量を増加に転じさせることを管理方策として0.9Fcurrentを管理基準として、2020年ABCを算出した。本資源は世代が短いため、年々の再生産の成功がその年の資源量に大きく影響する。また、再生産成功率の変動も大きく不確実性が高い。再生産の場となる沿岸の産卵場を維持し、コホート解析および卵稚仔調査から得られる資源情報に基づいて、翌年の適切な漁獲量を算定することに重点を置くのが妥当である。

管理基準	Target/Limit	2020年ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.9Fcurrent	Target	26	16	0.24 (-27%)
	Limit	30	19	0.30 (-8%)

- ABC算定規則1-3)-(3)を用いた
- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルのF値(漁獲係数)による漁獲量、Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、より安定的な資源の増大または維持が期待されるF値による漁獲量
- Fcurrentの削減率 β_2 を乗じた0.9Fcurrentを管理基準として、ABClimitを算出した
- Ftarget = α Flimitとし、係数 α には標準値0.8を用いた
- コホート解析では、半期(1～6月、7～12月)単位で寿命24月齢までの4期とし、0～5月齢(0歳)を1期、6～11月齢(0歳)を2期、12～17月齢(1歳)を3期、18～23月齢(1歳)を4期とした
- Fcurrentは2009～2018年の1～4期のFの平均値
- 漁獲割合は2020年の1期および3期の漁獲量/資源量と2期および4期の漁獲量/資源量の平均値
- F値は1～4期の平均値
- 親魚量は3期の資源量
- 年々の親魚量と過去10年(2009～2018年)の再生産成功率中央値から2020年以降の新規加入量を仮定した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は減少
- 直近5年間においては資源の減少が認められるが、長期的には資源量、親魚量は安定して推移している
- 2019年の資源量は7.3万トン、親魚量は4.3万トン

管理方策のまとめ

- 親魚量を増加に転じさせることを管理方策として0.9Fcurrentを管理基準として2020年ABCを算出した
- 年々の再生産の成功がその年の資源量に影響するため、再生産の場となる沿岸の産卵場を維持することが必要である
- 直近の資源情報に基づき、翌年の適切な漁獲量を算定することに重点を置くのが妥当である

執筆者: 入路光雄・安田十也・亘 真吾・宇田川美穂・渡井幹雄

資源評価は毎年更新されます。